

政務活動調査報告書

調査日	平成30年8月7日（火）
視察場所	広島県 広島市
調査項目	市立牛田中学校における「置き勉」について
視察者名	井手瀬絹子 野島さつき
市の概要	面積：906.53 km ² 人口：1,194,034人 人口密度：1,295.66人/km ² 世帯：540,609世帯 経常収支比率：97.4% 実質公債費比率：15.0%

<「置き勉」開始の経緯>

○広島市立牛田中学校は、1962年開校、創立56年目を迎える伝統のある公立の中学校です。開校時の生徒数は954人（21学級）男女共学、2学期制。生徒の活気と生徒会スローガンは、「志～挑み続ける牛田中～」です。教育目標は「自立し、互いに支えあい、高めあう生徒の育成」「地域に根差した活気ある学校」を目指しています。

○「脱ゆとり教育」によって教科書が分厚くなるなど子どもたちの通学カバンやランドセルが重くなっ



ている現状があり、教材を教室に一部置いて帰る「置き勉」を認める学校が徐々に増えています。一方で家庭学習への影響を心配する声もあります。

○牛田中学校はこれまで国数理社英の5教科の教材は自宅に持ち帰るルールでしたが、4月から英語と国語の一部教材を除き置き勉を認めました。見直しのきっかけの一つが、PC放送部が昨年作った8分20秒の動画、「The School Bag is Heavy!!」（学校のカバンが重い）」です。一人の生徒のリュックやサブバッグなどの荷物を量ると何と18.4キロ。生徒らにインタビューし、「坂道がとてつらい」「転びそうになった」「ひもが肩にめり込む」などと訴える内容です。

動画のテーマを提案したのは、2年の足立こころさん、入学時カバンの重さにお驚き、靴箱で上靴に履き替えようとしゃがむと、体を起こせないほど重く、その時に「軽くしたい」

を思ったことがきっかけとなり、解決策として「置き勉」を提案しています。動画の中では、忘れ物が増える、宿題をしなくなる、教室が汚くなるといった懸念も伝え、「キーワードは『信頼』大丈夫だと思わせる生徒力が問われている」と結んでいます。作品は市主催の文化祭で優勝し、動画はネットで配信されています。

<生徒と教員との協議等について>

○動画では、先生がカバンを背負い、学校までの坂道を上るシーンも出てきます。校内で動画を公開すると、大きな反響を呼び、学校も対策をとるきっかけになったそうです。「脱ゆとり教育」で教科書の大きさは1.5倍、ページ数も約3割増し、教科書の数も増えたことで副教材も増え、重さの増加につながっています。また、成長期の子供たちにとって、重い荷物を背負うことにより、本来は伸びるべき身長よりも抑えられたり、背骨のS字カーブが変わり、腰痛や肩こりを起こしたりする一要因には十分なり得るとも言われています。

「学校としてもこの問題に取り組もうとしていた時期でもあったため、議論の後押し役目ができたと思う」と話されていました。

○学校側は、カバンを軽くするため「特定の教材は「置き勉」可能というルール」を作り、さらに、本年4月から、英語と国語の一部教材を除き置き勉を認めました。まさに、学校と生徒のお互いへの信頼がルールを動かしたと言えます。

<「置き勉」の効果等について>

○4月からカバンが軽くなり、バスに乗っていても人にバッグが邪魔にならなくなった。との生徒の声があります。

○今日置いていく教材は何か、自分で考える力がつき、教室がきれいになると乱雑に置いていた生徒が目立つようになり、自然に教室が整理整頓されるようになったそうです。そこには、美化係の生徒が自主的にロッカーの整理整頓の点検を行い、毎朝きれいになったことへのお礼を皆に伝えるという行い、また、明日の授業でいるものを伝える教科係の生徒等、自発的な行動が生まれています。

○「置き勉」を通して、生徒は「生徒と先生がちゃんと話せばなんでもできる」と思えたこと。校長からは「自分たちで努力する姿がずいぶん見られている。家庭学習がおろそかになったということはほぼ聞いていません。一方的ではなくて両者がいろいろな面で考えられたことが大きかった」と述べられていました。生徒が自発的に考え、行動し、学校と生徒の信頼がルールを動かしたことは、「置き勉」の許可という結果以上の大きな成果と思います。

<今後の展開>

○広島市教育委員会でも、「重たいカバン」問題を把握していて、それぞれの学校と協議していくとしています。

○9月6日、文部科学省は、全国の教育委員会に従来の学校の対応を見直し、重量などに配

慮を求める通知をしました。子供の発育状況や通学環境に合わせ、学校側の工夫を促す狙いがあるようです。

<所 感>・・・井手瀬絹子

「脱ゆとり教育」によって、小中学校では教える量の増加で、教科書が分厚くなり、教材も増える一方、原則それらを自宅に持ち帰るよう指導しているところも少なくありません。そのため、ランドセルなどの荷物は重量が増し、腰痛となる子どもたちも出始めるなど、対策を求める声が上がっていることから、先駆的な取組を行っている広島県広島市立牛田中学校を視察し、勉強させていただきました。

広島県広島市立牛田中学校では、これまで国数理社英の5教科の教材は自宅に持ち帰るルールでしたが、4月から英語と国語の一部教材を除き置き勉を認めました。見直しのきっかけの一つが、パソコン放送部が昨年に行った8分20秒の動画「the schoolbag is heavy!!(学校のカバンが重い)」です。ある生徒のリュックやサブバッグなどの荷物を量ると18・4キロでした。生徒らにインタビューし、「坂道がとてつらい」「転びそうになった」「ひもが肩にめり込む」などと訴える内容です。テーマを提案したのは2年生の女子生徒、入学時、カバンの重さに驚き、軽くしたいと思ったことがきっかけです。動画は解決策として「置き勉」を提案します。それに対し、一方的な要求だけでなく、公平な視点で、忘れ物が増える、宿題をしなくなる、教室が汚くなるといった懸念も伝えている点について、私は大変関心いたしました。「キーワード」は「信頼」大丈夫だと先生に思わせる生徒力が問われている」と結んでいます。校内で動画を公開すると、大きな反響を呼び、学校も対策をとるきっかけになったといえます。特定の教材は「置き勉」可能というルールができたことで、以前よりカバンが軽くなったといえます。今日置いていく教材は何か、自分で考える力がつき、教室がきれいになると、乱雑に置いていた生徒が目立つようになり、自然に教室が整理整頓されるようになったそうです。そこには、美化係の生徒が毎朝、きれいになったことへのお礼を皆に伝えること、また、明日の授業でいるものを伝える役目の生徒なども要因の一つという事です。このように、生徒が自発的に考え、行動し、学校と生徒のお互いへの信頼がルールを動かしたのです。動画はネットでも公開され、全国からも反響を呼んでいます。生徒のリアルな声と姿を表現する新しい形に私も共感を覚えました。

本市では、以前から、子どもたちの実情に合わせて負担軽減策を各学校が考え、その実態に応じて判断し、実施しているとのことで、少し安心をいたしました。47の小学校と20の中学校で、負担軽減策への取り組みに温度差が無いことを願います。今年の酷暑を考えますと、思いランドセルやリュックを背負い、手に水筒や袋をもって通学すること自体暑さが増すことは必至です。そのためにも、子どもたちに、岡崎の学校では基本的に必要に応じて置き勉、つまり、置き用具をしても良いとしているのであるのなら、今日は何を持って、何を置いて帰っても良いのか、自分自身で適切な判断ができない子供には、周りでサポートをするなどの配慮も必要ではないかと、意見を述べさせていただきました。

百聞は一見にしかず、1人でも多くの皆さんにこの動画を見て頂きたいと思っておりますし、生

徒の自発的な心と取り組みを是非とも岡崎の子どもたちに紹介していただく価値があると思ひ提案させていただきました。教育委員会から「生徒が自分自身の周りのことに問題意識を持ち、自発的に改善に向けての取り組みをしたところが評価できる映像でしたので、参考にしていきたい」との回答をいただきました。牛田中学校の生徒が、問題意識をもって改善に取り組む自発性が本市の生徒たちに伝わることを期待したいと思ひます。

以上

<所 感>・・・野島さつき

「置き勉」とは「置き勉強道具」の略語です。ゆとり教育の見直しで小中学校の教科書は重くなりました。教科書協会によると中学1～3年生が使う教科書の全ページ数は「ゆとり教育」時代の2006年度は4430ページでしたが、「脱ゆとり」後の16年度は5783ページと約3割増。小学校も15年度は6518ページと10年前と比べ34%増え、図や写真を多く使い大判化も進んでいます。置き勉は、比較的長距離を通学し、部活動も忙しい中学生の間で広がりが出ています。今回視察させて頂いた広島市立牛田中学校では、PC放送部の生徒たちが作成した動画「School bag is heavy」がきっかけで、重たいカバンの対策として「置き勉」が認められることになりました。

広島市では、山の中腹にある学校が市内の半数を占め、学校安全保健委員会の先生とドクターとの間で、『カバンの重さと健康との関係』などが話し合われており、牛田中学校でもこの問題に取り組もうとしていた時期でもあったそうです。学校としては、教材を置いて帰る選択をするには『自宅学習への影響』『管理上の不安』などの心配がありました。そこで動画では、カバンが重いという事実を伝えるだけではなく、この問題を解決するために、自分たちができることとして、先生方の心配に対し、「信頼」と「生徒力」で『大丈夫』と思わせることだと結んでいます。

その後、学校側は置いていってもいい教材を教員全員で何度も話し合い、その結果、生徒を信頼し、自分自身で持ち帰る教材を判断させることにしたといます。生徒たちも自主的にロッカーの整理整頓の点検を行うことにしました。さらに生徒と先生が話し合いを重ね、本年4月からは、各教科係が持ち帰りの教材を伝え、あとは生徒の判断に任せるようになったそうです。三村校長は、「美化委員を中心に自分たちで努力する姿が随分見られるようになった。家庭学習がおろそかになったということはほぼ聞いていません。一方的ではなくて両者がいろいろな面で考えられたことが大きかった。」といわれました。

いま、全国各地で小中学生が通学するときの荷物の重さを懸念する声が出るなか、文部科学省は9月6日、全国の教育委員会などに対し、重量などに配慮するよう求める通知を出しました。子どもの発育状況や通学環境に合わせ、学校側の工夫を促す狙いがあるといひます。全国では既に、宿題に使わない教科書を学校に置いて帰る「置き勉」を認めたり、特定の日に持ち物が偏らないよう、数日に分けて持ってくるよう指導したりしている学校があります。通知ではこうした取り組みを紹介し、「必要に応じ適切な配慮」を求めています。この通知を受け、実態調査をはじめた自治体もあります。大事なことは、教育委員会や学校側で一方的に決めてしまうのではなく、生徒とともに話し合うことだと思ひます。何のためにルール

があるのか、自分たちにとって何が必要なのかを「考える」ことが『生徒力』を培うことになり、お互いの信頼関係を深めることに繋がります。牛田中学校を視察し、教育活動の一環として「置き勉」を考えることが大切であると実感しました。

以上